

ピントリッキオの円形聖母子画におけるトスカーナ地域伝統の受容

永井 裕子 東京大学

本発表は、ベルナルディーノ・ピントリッキオ（1454頃-1513）に帰属される三点の円形画（トンド）形式の板絵を、16世紀初頭のシエナ時代の作品として位置付けた上で、この地域特有の伝統がこれらの小型聖母子像に見られることを明らかにするものである。

ピントリッキオは15世紀末にラツィオおよびウンブリア地方で教皇庁関連の作品を多数制作し画家としての名声を確立した後、1503年頃にピッコローミニ図書館のフレスコ画装飾のためにシエナに移住した。シエナ絵画館所蔵の《聖家族》、ポルディ・ペッツォーリ美術館（ミラノ）およびウェルズリー大学デーヴィス美術館の《聖母子》の円形画三作品は、先行研究では1480年代から1500年代までの広い年代に位置付けられてきたが、様式的分析から画家晩年のシエナ滞在期に制作されたと考えることができる。三作品に描かれた人物像は、なだらかにぼかされた陰影によって肉付けされた立体感と量感が特徴的であり、1490年代に制作された代表作ヴァチカン宮殿ボルジアの間のフレスコ画やサンタ・マリア・デイ・フォッシ祭壇画（ペルージャ、ウンブリア国立美術館）の線描を重視した様式とは異なる。この様式は、1500年以降に制作されたと推定できるフィラデルフィア美術館の《聖母子》やシエナ時代の諸作品に見られるものである。三作品の中でも、シエナ絵画館の円形画は、同市のカンパンシ女子修道院が所蔵していたという理由からシエナ時代の作品だと考えられているが、以下の検討から、他の二作品も同じ時代に位置付けることが可能である。

まず、各作品に描かれた図像が、シエナが位置するトスカーナ地方に関連することを示す。まず、デーヴィス美術館作品に描かれた丸々とした臀部の幼児キリスト像は、レオナルド・ダ・ヴィンチの《ブノワの聖母》（エルミターージュ美術館）に由来することが指摘できる。このキリスト像はトスカーナ地方の画家の間で流布したことが先行研究で明らかにされており、ピントリッキオもシエナ時代にこの図像を目にしたと考えることができるだろう。また、シエナ絵画館およびポルディ・ペッツォーリ美術館の二作品の図像が、トスカーナ地方で流布していたドメニコ・カヴァルカ周辺の『聖教父伝口語版』に依拠していることを詳らかにする。実際、この文献の記述を基に、同時期のトスカーナ派の画家たちによって荒野での聖家族と洗礼者ヨハネの場面を描いた作品が多数制作されており、ピントリッキオもシエナにおいて同図像を円形画に用いたと考えられるのである。

ピントリッキオの小型聖母子画は、一般に、固定的な型を用いた大量生産的作品であるとされているが、シエナ時代の円形画の分析から、個々の作品が画家の様式的な変遷を反映していることはもちろん、受容された地域の図像伝統も考慮に入れて構成されていることが明らかとなる。

(ながい・ひろこ)